

研究推進委員会通信

令和元年 10 月 9 日

「平成 29 年度全国学力・学習状況調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」（国立大学法人お茶の水女子大学）では、小・中学校を対象に実施されている全国学力調査において「教育効果が高い学校」では以下の特徴があると示しています。本校の実践である研究推進委員会の授業研究会にあてはまるものをいくつか挙げます。

□若手とベテランが学び合う同僚性と学校の組織的な取組

（例：初任者や若手教師の研修機会を生かして全校教師が学び合う。）

□小中一貫教育による一貫した学習の構え

（例：小中で家庭学習の方法、学習ルールや授業スタイルを統一。話し合いや書く力、読書習慣・言語指導の重点を共有。）

□言語活動や学習規律などを重視した授業改善の推進

（例：生徒一人ひとりの成長に着目して授業研究を行う。考えを伝え合うための支援や場の工夫。）

□地域や保護者との良好な関係を基盤とした積極的な地域との連携

（例：地域の一員として活動に取り組む。自治体でキャリア教育を推進。地域人材リストの作成。）

このように、授業研究会は学校全体の教育力向上に寄与することが考えられます。平成 26 年度においても同様の調査研究が実施されており、「授業の冒頭でめあて・ねらいを示す」「授業の最後に振り返りをする」「話し合いを取り入れて思考を深める」など、これまでの研究推進通信で示してきたことも書かれています。研究推進が進める授業研究会の場をぜひ自己研鑽の場であると捉えていただきたいと思いますし、運営側としても形骸化しないような工夫をしていきたいと思います。そのため、先日いただいたアンケートをもとに来年度の授業研究会の在り方を検討したいと思います。

さて、第 3 回の授業研究会では昨年度同様に PBL（問題解決学習）を取り入れた授業で学んできた生徒の実践発表の場とします。地域課題が何かを捉え、解決するための提案をポスターセッションによって説得力をもって伝わるように表現します。昨年度の研究会には企業の方や小・中学校の先生、市民協働センターの方も多く来校してくださいました。多くの先生にも参観していただけたらと思います（授業研究会はありません）。

第 2 回授業研究会より「12 か年の学びの系統性で意識していること」

- ・読解力の育成のために、どうしてこのような心情なのかを動作から読み取ることができるように考えさせている。
- ・教科部会に参加し、重点的に取り組んでいる内容を知ることができた。中学校ではどこまで学習してきたのか、高校ではどこまで求めるのかを意識している。
- ・小、中学校の既習事項を必要に応じて取り入れている。
- ・今後、系統性の確立を意識して題材の見直しをしたい。
- ・英語・数学以外に中学校の授業をもっと参観する機会があれば、多く学ぶところがあると思う。
- ・おぼえて欲しい用語はフラッシュカードにしている。
- ・語彙力の向上
- ・単元の初めに、中学の復習をしてから高校の学習にはいる。そうすることで、中学ではできなかったことが高校ではできる！という経験につながる。

多くの先生が「検討中」とのことです。ぜひ、後期のうちに様々な挑戦を試みてください。